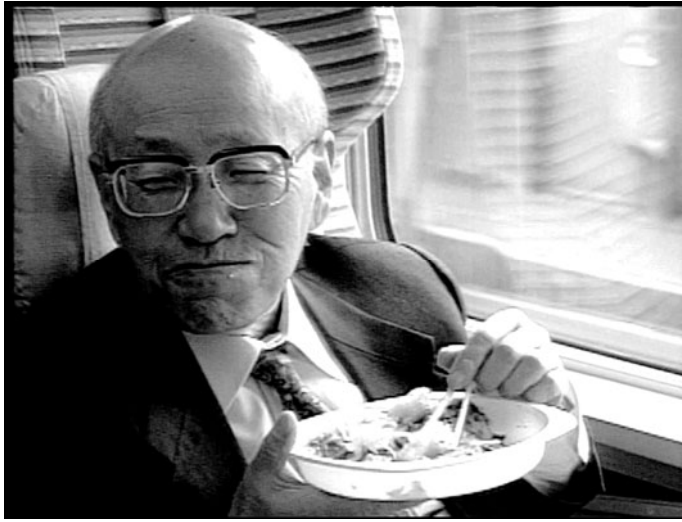


「平成の鬼平」 中坊公平さんを偲ぶ



曾根 英二(RSK)

みんがいの語り部 3月 民放史
題字 中川 順

日本弁護士会会長、整理回収機構初代社長などを歴任した中坊公平さんが5月に亡くなった。1990年、瀬戸内海豊島に産業廃棄物が山積みされ、住民・漁民が県行政の対応に怒り、立ち向かった。その弁護に携わったのが「平成の鬼平」こと中坊公平さんでした。中坊さんが県知事の謝罪と原状回復を勝ち取るまでの一連の豊島報道を続けた山陽放送の曾根英二さんの民放史です。
(編集委員会)

「公平さんのような空やね」

参列者の一人が言った。2013年5月5日の京都は雲ひとつない五月晴れになった。

メリハリのきいた生き様の元日弁連会長の中坊公平さんのような空という訳である。3日に中坊さんが心不全で亡くなった。東山区の自宅で密葬が行われた。ごく近い人だけの、わずか30人ほどが参列する寂しい葬儀だった。

「何度も死にそうや言うて、死ななんだ。今度ばかりはほんまに死んでもたのに教えてくれなんだ」と司法修習が同期の老弁護士が言っ、参列者から小さな暖かい笑いが起こった。友人故の率直な無念の発露だった。

「平成の鬼平」と言われ、首相にしたい人ナンバーワンにも名前が上った中坊さんの83歳の死去であった。ここ数年体調を崩して週3回、人工透析を受けていた。

それでも週が明ければ退院する予定で、「突然のことで・・・」と会葬者に挨拶した奥さんの表情が急な死を物語っていた。私自身にとっても突然の訃報だった。中坊さんと豊島の安岐正三さん、それ

に私との3人だけで集まる恒例の飯食い会が4月末に予定されていたが体調不十分で先延ばしにはなっていた。それでもお元気だと思っていた。

私には「平成の鬼平」と言うより、「豊島(てしま)の中坊さん」である。瀬戸内海の香川県土庄町小豆島の南西にある周囲20キロの豊島が1990年、全国最悪という産廃の不法投棄事件に見舞われた。時効間近の1993年、人口1600人ほどの豊島がたどり着いたのが弁護士の中坊さんだった。

「どうも、お待たせしました」昼食もほどほどに口をもぐもぐさせながら現れたのが中坊さんだった。放送記者だった私はカメラマンと一緒に豊島から同行取材していた。マスコミは私たちだけである。フエリーと新幹線などを乗り継いで4時間かけての大阪の中坊事務所だった。

「業者相手に裁判起こしても、勝つには勝つけど、意味がない。県の費用で撤去させないとね。それにエゴの闘いであつてはならない。それとも泣き寝入りするのか」こ

んな具合で住民に話す気さくな中坊さんであった。1993年9月25日のことであった。

「安岐です。漁師してます」「あきは春夏の秋?」「いえ、安心の安に讃岐の岐です仕事は漁師してます」その日、住民たちは「なにか、分かったように思う」と希望を口にした。

半月後、中坊さんは若い弁護士を連れて豊島入りする。野球場なら10数面取れるという産廃の不法投棄現場に立った。

「広いね。この搬入を止めることができなかった。香川県が共犯的役割を果たしたかやね」

中坊さんは産廃が何層にも数十メートルに亘って山をなすゴミの山の斜面を長靴ですたすた降りた。「先祖伝来の土地を守るんだという」ことを、どこまでおやりになるつもりか、ほんま言えば聞きたい」島の公民館に戻って、島の世話役たちに問いかけた。

「中途半端なら、お止めになった方が。もう遅いですわ。そんなら下で休憩させてもらって…」

中坊さんはノートを音を立てて閉じた。ノートを置いていくのはまた戻って来るとの宣言。島の住

民たちを残した。自ら考え、覚悟をという訳である。

「被害者が被害者だと意識して立ち上ることがどれだけ難しいか。先生、ようやらんと言われても、それはそれでええんです。弱者が立ち上るのがいかに難しいか。立ち上がったら、立ち上がったで、やれ、思想が違う、金目当てでやとか、言われるもんです」

老獪な中坊弁護士がカメラの前で語った。2階では豊島の主だった人たちが議論を戦わせていた。

「更地に戻るかどうか分からんけど、何もせんなら、このままやで」と安岐さん。「やるだけではないかんわい」と長老たち。それでも住民たちは、香川県相手に闘うことを決めた。パタパタパタとスリッパの音を立てて2階に上がった中坊さんは自治会長の「できるだけやることに決めました」との報告に宙を睨み、沈黙のあと口を開けた。

「それなら私たちも泊り込みで来させてもらって。住民の被害を調べる班、県についての班……元に戻してくださいと言うのでなく、お前ら(香川県)に戻す責任があるのやと言うて行くのやから」

中坊さんは明快だった。豊島にて半日も掛からない間に闘う態勢を整えてしまった。

「えらい(凄い)人が味方についたですね」

会議のあと、私は住民のひとりに言った。

「ほんまやな」

住民も田舎記者の私も中坊さんが元日弁連会長の超大物弁護士と知らなかった。

「正直言つて、私、金持ちだつせ。」

「正直言つて有名だつせ」

ちよつぱり自慢もある中坊さんだった。



産廃の山を長靴で降りる中坊さん
(1993年、初の豊島訪問)

住民たちは島を歩き、証拠を集め、一ヶ月で産廃紛争で初の国の

公害調停を申請した。中坊さん64歳。日弁連の会長を務めあげ、功名を遂げた人が無報酬で引き受けた「豊島の闘い」だった。以来私は20年に亘って中坊公平さんを見て来た。

「最初に島の人たちが事務所に来たときに曾根さん一緒に来られた。この事件はテレビがついて来る事件なんやと思いましたが」

「曾根さんはなかなか図々しいんだつせ」

取材も、以来、ほとんどの場面を記録した。調停の山場の1997年、98年頃には年間の豊島入り取材日数は60日を越していた。6日に1日は豊島にいた計算になる。取材テープも20分テープで3千本近くに上る。中坊さんへのインタビューも限らない。

森永ヒ素ミルク中毒事件の被害者弁護団長を引き受けた際のエピソードがリアリティーに富んで面白い。左寄りとみられる弁護団の団長を引き受けるは得策でないかもと中坊さんは迷い、同じ弁護士の父親に相談する。

「父は言下に、公平、お父ちゃんはお前をそんな情けのうに育てた覚えはない。赤ちゃん相手の犯罪

に右も左もあるか」

中坊さんの「弱者の味方」の原点であった。

「誰も教えた訳でもないのに『あほう』という」

「赤ちゃんの飲むミルクを始末して安いミルクにした私が悪い」ヒ素ミルク中毒の子を抱えた母親が自らを責める姿に涙したという中坊さんだった。

***豊島での数々の中坊語録**

豊島の闘いでの中坊さんの指揮ぶりは厳しかった。国の公害調停は費用と時間の掛かる裁判に変わって、一日でも早い公害被害の停止と問題の解決を図ろうというものである、1970年代の公害の多発を受けて、当時の総理府に公害等調整委員会が置かれた。

中坊さんの作戦は国の公害調停を使うことであった。全国最悪の産廃の不法投棄事件に、「香川県の責任」を認めさせ、「原状回復」を果たさせる。廃棄物その物や、汚染度合いを調べるにも膨大な費用が掛かる裁判は、到底、住民には不可能だという判断である。両者対等の原則の裁判では弱者の住民

は太刀打ちできないと、公害調停を申請した。

調停と同時に始めたのが県庁前での抗議の立ちっ放し。毎日5人が始業時から終業時まで県庁前に立った。

「県はだました責任を取れ」
「元の島を返せ」

ゼッケンと幟に豊島の住民の怨念が見える。新年の仕事始めにも住民たちは静かに立った。手にはカイロ。

取材者の私は向い側のホテルの屋上からカメラマンと一緒に知事を狙う。

県議会棟から県庁舎へのガラス張りの渡り廊下に知事が現れ挨拶を交わす。屋上では正月の職員の記念撮影。寒さの中の住民の立ちっ放しなど眼中にない行政の姿を『NEWS 23』(TBS系)などで全国へ発信した。

豊島住民の立ちっ放しの抗議は冬の12月から、住民が日陰を好んで立つようになる翌年の5月まで150日間に亘って続けられた。「金も体力もないものは知恵をだせ。あかん。あかん」
中坊さんは住民たちに自ら立ち上がることを説いた。

豊島の数少ない若者が中心となつた香川県内の市町を歩いて回るメッセージ・ウォーク。

0泊3日、夜行バスで敢行した東京銀座への抗議のキャラバン。などなど、住民が自ら考え捻り出した行動に豊島が燃えた。

県庁前の150日間の立ちっ放しで、公調委は2億3600万円という膨大な費用を掛けた現地調査を実施する。豊島が事実の認定を手にするにつながっていく。



中坊さん、曾根、安岐正三さん
(豊島の住民代表)

***我がこととしての中坊さん**

1995年6月、中坊さんから電話が鳴った。

「曾根さん、ちょっと話があるん

で岡山へ伺いまっさ」

中坊さんの電話に現地調査の結果が出たことを察知した。

「いえいえ、こちらから伺いますから」と私は大阪の事務所に向つた。現場の産廃から高濃度のダイオキシンが検出されたというものであった。

「やあやあ、すいません。忙しいのに。磯のカキにダイオキシンが出ましてね。事実は事実やけども、公表することの可否。陸で生活している人はええけど、海で生活している人には問題やから。この資料をそっくりそのまま曾根さんたちに知らせていいもんかどうか」
すべての調停を公開してきた

中坊さんが逡巡した。調停は公表の義務はない。島のリーダーのひとり現場沖合いでハマチ養殖をしている安岐正三さんが一番影響を受けるのだが、本人はすべて公表して欲しいと言ってきたと話した。

「島のためにそれは客観的な事実なんだから、事実は事実として報道されることはやむを得ないと安岐さんは言われる」

中坊さんの公表の腹は決まっていた。自分の考えを理解せよとい

う思いがあったのだろう。

「住民、住民、言うて、十把一絡げに見られない。老若男女いはる。相当きめ細かい配慮をして行かないと成就しない。運動において最大の悲劇というか、最も忌むべき行為は分裂なんですね」

分裂こそ最大の敵と口すっぱく言うことになる中坊さんであった。現地調査の結果はすべて公表された。産廃の撤去が必要という裏づけの事実を住民が手にしたことになる。

一方で96年3月には安岐さんが家業のハマチ養殖を廃業することになる。

「私は被害者なんや。なのに消費者にとつては加害者的な役割をしてしまうのかな。見ザル、聞かザルはできなかつた。中坊さんと会ったときからやれるとこまでやると約束していたんやから」

涙ながらに廃業を語った安岐さん。中坊さんは苦境に沈む安岐さんの周りを涙を流しながら『上を向いて歩こう』を歌い、ぐるぐる回って、やめようとしなかつたという。

*住民の側を向かない行政との闘い

「国民を守るべき行政が、国民を苦しめる側に回っている」

「行政の無病性(無謬性)がまかり通るのか」

なかなか住民の側を向こうとしない行政に歯に衣着せぬ批判も展開した中坊さんでもあった。「住民は根無し草」と地元小豆島選出の大物県議が住民を揶揄したことがある。集落ごとの座談会に出た中坊さんが集まった住民たちを嘗め回すように言った。

「みなさんが選んだ県議が豊島の住民は根無し草やと言っている。それも公の席で。きょうはそれが言いたいことや」

『ニュース23』では豊島の特集だけでも15回を超えて放送、97年7月には公害調停の中間合意を迫られているのに合わせ『筑紫哲也in豊島』を番組丸ごと産廃の山の上から生放送したこともある。中坊さんは言う。

「なぜ、県がそこまで(頑なに)頑張るかという。それは無謬性というけれど、県民みんながそういうものを支えている」

国民主権の実質化、観客民主主義でなくグラウンドに降りよと中坊さんは訴えた。県知事が「(住民は)欲しいから金が」と問題発言した際にも中坊さんは厳しかった。

「そんなことはないよね。啜われるのは誰でもない、香川県民ですよ」と。

県内100ヶ所座談会を繰り広げて足腰も鍛えた豊島の住民は思いあまって県議選に豊島から候補者を立て当選させる。

「挫折も知っている候補、弱い者の目線で物が見える候補をよろしくお願いします」と中坊さんは応援のマイクを握った。

国の公害調停は7年を要した後、2000年6月に最終合意に達した。知事の謝罪と原状回復の実施であった。豊島小学校の講堂ステージで挨拶に立った中坊さんは力強く語りかけた。

「いかなる権力よりも強いものがある。それは真実だ」

一連の豊島報道で中坊さんと共に山陽放送報道部が「菊池寛賞」を受賞したのは報道記者として生涯の喜びである。

平成の鬼平とマスコミから中坊さんが持ち上げられた理由のひとつにバブルの後始末があった。

国から乞われて国策会社の住宅債権管理回収機構の初代の社長を引き受けた。ここでも豊島事件同様に無報酬。

「国民に2次負担はさせない」と厳しくバブルの後始末に臨み、およそ2兆円を回収した。

「朝だけが体調ええねん。段々悪くなる」

SPもついた激務でもあった。東京から京都の自宅に帰る新幹線の車中取材したことがある。回転させた前の席に足を伸ばして爆睡の中坊さんだった。

「朝から晩まで戦場やな」

京都市内の眼科に向うなかで思わず激務に触れた。大蔵省(当時)の役人、検察や100人を超える弁護士を抱えての指揮官には辣腕で自ら先頭に立つ形の中坊さんしか適任はいなかったのかもしれない。

*忍辱(にんにく)の日々

支社を回る電車の中でも打ち合わせ、「食べてるときが楽しみですねん」と弁当を部下とともにする

支社を回る電車の中でも打ち合わせ、「食べてるときが楽しみですねん」と弁当を部下とともにする

支社を回る電車の中でも打ち合わせ、「食べてるときが楽しみですねん」と弁当を部下とともにする

支社を回る電車の中でも打ち合わせ、「食べてるときが楽しみですねん」と弁当を部下とともにする

支社を回る電車の中でも打ち合わせ、「食べてるときが楽しみですねん」と弁当を部下とともにする

支社を回る電車の中でも打ち合わせ、「食べてるときが楽しみですねん」と弁当を部下とともにする

支社を回る電車の中でも打ち合わせ、「食べてるときが楽しみですねん」と弁当を部下とともにする

大食漢でもあった。「なんでこんなえらいめ(しんどいめ)してと思うけど、それが弁護士やないかと」

弁護士こそ天職と言う中坊さんでもあった。豊島の公害調停が動いている頃でもあり、社長業の最中の週末に休みを返上して豊島入りすることも度々というハードぶりでもあった。

住宅債権取立ての重要案件は自らが見る社長直轄にした。この社長直轄で中坊さんは足をすくわれることになる。



中坊公平さん
(2011年)

社長引退後の2003年になって、債権取立てで部下の弁護士に行き過ぎがあったとして責任を取って弁護士バッジを外した。

「はじめをつけることを命にしてくださいのだから、散るときも潔く散ろうと」

記者会見する中坊さんに憔悴が見られた。背広の胸に弁護士バッジ

はなかった。命より大事とも言える中坊さんの弁護士廃業であった。記者会見から80日、中坊さんが豊島を訪れる。岡山駅の新幹線ホームに気遣う安岐さんの姿があった。苦境に中坊さんが歌った『上を向いて歩こう』が頭のなかで渦巻いていた。

お元気ですかと声を掛けた私とカメラに、「それでもないな」と中坊さん、額を指で掻き、唇を噛んだ。

豊島に海上タクシーで着いた中坊さんは島の人たちに迎えられる、漸く笑みが見えた。島の公民館で婦人たち手作りの料理で歓迎された。

「わあ、海老があるやん。また卑しいから食べてしまおう」

中坊さんは嬉しそうだったが、住民への挨拶には苦悩が滲んだ。

「辱めを忍ぶと書いてにんにくと読むのだが、時間が経つのが遅い。今度は大変でしたねと声をかけてくださるが、その一言ひとことが身に刺さる。冷たい。このほか冷たい」

中坊さんの口から辱めに耐えるという言葉が出た。この日、産廃撤去の始まった現場を見た後、中

坊さんは島のリーダーたちに注文をつけた。「分裂こそ最悪の選択である」と。帰りのフェリーから手を振る中坊さんに安岐さんが埠頭から声をかける。

「先生、来たときより元気になった」

「説教しよつたら、元気が出るねん」、中坊さんが笑いながら返事を返した。

「弁護士廃業」、「忍辱の生活」、「死」と中坊さんからの便りに悶々とした中坊さんが踊る。

2008年、癌と闘っていた生前の築紫哲也さんが京都での自身の大学講座に中坊さんと呼んだ。

「住専処理、国民のためにと働かれたのに弁護士資格を失われた。理不尽だ。それでも真実が強いとお思いですか」と筑紫さん。

「古い話ですが、日露戦争の東郷元帥が艦橋に立っているでしょう。あれが理想ですね。債権回収で事故が起きたら、弾が当たったのと同じです。指揮官、どこにあるか?」

講義の後、筑紫さんにマイクを向けた。

「中坊待望論というか、持ち上げるだけ持ち上げておいて、降ろすときもばつとやる。これはメデイ

ア論ですよ。批判には相対的批判と絶対的批判があつて、住専の話は法的に批判が当たるのかも知れないけど、中坊さんを絶対否定するような話でないでしょう」

筑紫さんの話の説得力があると思う。それにしても、中坊さんの「忍辱の日々」は10年も続いたのだと思う。

「あの場所(大阪の中坊事務所)が懐かしい。あの場所へ行くのが夢ですね」

中坊さんの夢は叶わなかった。司法制度改革で司法試験の合格者増の事態を招いたのが中坊さんだという弁護士会の批判も中坊さん復帰を妨げたとの見方も強い。

「私が弁護士であり続けたら?豊島には物を言つたでしょうね」と中坊さん。安岐さんに豊島の原状回復を見届けるよう言い、島での仕事を勧めた中坊さん。

「中坊さんもええ仕事してますやろ。はああはは」と笑つた中坊さん、豊島には早すぎた死であった。

同時に、マスコミは中坊さんの「忍辱の10年」を描かなかつた。冷たくはなかつたかと自他ともへ問いかけていと思う。

資料提供【山陽放送】